

勤労働員で軍服作り



堺市にあった「福助」の縫製工場で＝1944年ごろ撮影

亡き母 女学校時代

ニッポン 写真遺産

思い出まるごと
スキャン

整然と並ぶミシンの列と、真剣な表情で作業しているセーラー服姿の女学生たち。亡き母の遺品の中にあつた一コマだ。

この写真を含む母のアルバムをデジタル化したのは、河内長野市の鶴岡喜美雄さん(65)。デジタル化した画像は、弟にも渡してやりたいと話す。「お前もオ

カンのこと、きちんと覚えておけよ、と言いたいの

で」
そんな鶴岡さんの母・敬さんは堺市出身で、1928(昭和3)年生まれ。府立堺高等女学校(現在の泉陽高校の前身)に通っていた戦時中、勤労働員のため、同市にあった足袋・靴下製造大手「福助」の縫製工場で軍服作りをしていたという。そのときに撮られたのがこの一枚だ。

母から聞いた話によると、「からだの大きい子は農作業、小さい子は軍服作り、と割り振られた」。この写真は44年ごろに撮影さ

れた。既に戦局が厳しくなっていた時期で、原材料の調達や、完成品の前線への補給が難しくなり、この勤労働員は数カ月で終わったそう。

当時、完成した軍服に添えた「慰問袋」に、女学校仲間と手紙を入れていた。名前や住所も書いていたため、戦後、それを見たという復員兵が突然自宅を訪ねてきたこともあったという。

敬さんは、2016年に88歳で他界した。写真をはじめ、卒業証書などの様々な思い出の品をきちんと大切に保存していた母だった。しかし、「学校の成績表だけは見つからへんかったんです」と鶴岡さん。

「生前、オカンに聞いたら、『戦時中の何もない時期に、たきぎ代わりに燃やしてしまた』と言うてましたわ。ウソかホンマか分からんけど」と懐かしそうに笑顔を浮かべた。(樋口慶)

◇ ◇
朝日新聞社のアルバム・古写真デジタル化サービス「ニッポン写真遺産」に寄せられた印象深い写真を随時ご紹介します。同サービスへの問い合わせ・資料請求は、06・7878・6588へ(平日午前10時～午後5時)。